

学生相談共有ばなし・第七話

カウンセラーと教職員の連携〈初期適応支援の例〉

吉武 清實

(東北大学 高等教育開発推進センター・学生生活支援部・学生相談室教授)

学生相談カウンセラーと教職員の連携についてのお話、今回は、理工系学生の学業への適応支援がテーマです。

学生支援の三層モデル

日本学生支援機構の報告書「大学における学生相談体制の充実方策について」(平成一九年三月)は、学生支援の三層モデルを提示している。これは、とてもよくできたモデルで、大学が学生支援を充実させる方策は、第一層の「教職員の日常的支援」、第二層の「制度化された支援」、第三層の「専門的支援」のそれぞれを充実させることであり、これら三つの層のそれぞれの間での「共有」・「共同学習」・「連携」・「協働」をよく行っていくことである、とするも

のである。

第三層の「専門的支援」充実化のひとつとして、学生相談室へのカウンセラーの配置がある。配置されるカウンセラーは、日常の支援を行う教職員(第一層)と、また、チューター制度、複数指導教員制度などの制度化された支援を行う教職員(第二層)との間で、情報の共有化を図り、連携・協働をよく行っていくことが求められる。以下、教員との連携・協働の例である。

道具的(実際の)サポート提供の仕組みを作る

〈加工事例一〉ここに示すのは、筆者の大学において、カウンセラー(第三層)と、教員(第一層)との連携が、支

援の制度化(第二層)に展開した例である。

発端 平成一二年の五月、筆者(学生相談所カウンセラー)の所へ新入学生が飛び込んできた。工学部の一年生であった。聞けば、入学以来、物理学、線形代数学、解析学の授業を理解していくために、土曜も日曜もなく予習復習するひと月余であったと言う。もはや、くたくたになっってしまった。大学生になれば、もう少し遊ぶ時間、新しい事をしてみる時間ももてるだろうと、楽しみにしていたのだが、違っていた。このところ、寝付けず、集中力がなくなってきた、授業もどうでもいいような気がするようになってきて、このままではいけないと思つて学生相談所に来た……。

この学生が陥りかけている危機状況の問題解決には、カウンセリングによる心理的アプローチのみでは足らず、同時に、いやむしろ、それ以上に、一年時の最初のテストへ向けての勉強法(どの程度勉強すれば良いのか)について、また、物理学等の補習について、実地的な支援(「道具的サポート」)が早急に得られるようにしてあげることが効果的であることは明らかであった。

共有化 筆者は、ある学生のごとで相談を受けたことで知己であった工学部の教授で、学部の教務委員長経験のある先生に、電話で、相談した。「工学部の新入学生や留

年状態からリスタートしようとする学生の中に勉強法や理系科目の補習支援が必要な学生がいます。どなたか名誉教授の先生などでこうした学生を支援する仕組みをやることはできないものでしょうか」。教授は、三年次以降の専門の授業について、補習が必要であることは認識して対応しようとしていたこと、しかし、一、二年次学生にもニーズがあるとは思っていなかったこと、早急に対応したいこと、名誉教授による援助というプランは現実的でないことを、筆者に述べた。

試行プラン そうして、急場の支援のためにと、周囲の研究室の教授の協力も得て、自らの研究室と周囲の研究室の大学院生からサポーター有志を募り、サポーターのメーリングリストを作ってくれた。これらのサポーターは「工学部修学アドバイザー」と名付けられた。一週間も日をおかない間のことであった。またその後しばらくして、工学部として、この学期のテストの少し前の時期に、TAによる一、二年生の希望者向けの一斉補習授業を行うことに決定したとも筆者に伝えてくれた。

試行とその結果 試験シーズンに入るひと月ほど前、勉強法や補習の支援を要する学生たちのために、工学部・学生相談所共同で「個別補習サポート」の利用を呼びかける掲示を貼り出した。筆者は、これに応じた学生や、当該の

新入生、さらにはカウンセリングの場で留年や休学状態からリスタートしようとする学生について、メーリングリストに登録されている学生につないだ(たとえば、「どなたか、△日か△日に物理学Aを教えることができるTA院生さんはいませんか」。その際、支援を受ける学生とサポーター役の学生の、「お見合い」の場に同席し、その後の様子を見守る(相性の確認、トラブルの発生回避と対応の意味を持つ)ようにした。当該学生を含め、勉強法・補習の支援を受けた学生たちは、テストを乗り切った。学生たちは、次の学期からは支援を必要としなかった。こうして初期適応を支援することの重要性が浮き彫りになった。

一方、工学部が試行したTAによる一斉補習授業は、四〇名以上の参加者を得た。しかし、参加者は授業が理解できない学生というよりはむしろ、授業がある程度以上理解している学生たちで、もっと理解したいという動機から参加したものであり、本当に補習を必要とする学生の参加はなかった。次の秋学期のテスト時になると、参加者はほとんどなく、翌年の春学期のテスト時も同様であった。そこで、以後、この一斉補習授業は継続されないこととなった。

「工学部修学アドバイザー」の制度化 これら一連の試行的経験から、その翌年、工学部は、工学研究科大学院生T

A「修学アドバイザー」による個別支援を制度化した。学生相談所は、カウンセラー不足から多忙な状況にあったが、これに協働して取り組んだ。コーディネーター役である。カウンセラーこそが、ニーズを要する学生を日常的に把握する位置にあり、サポートを行う側と行われる側の「相性」をチェックする位置にあったからである。

当初、メーリングリストに登録されるTAサポーターは、一〇名ほどであった。この数では、必要な時に必要な補習を受けられない場合が少なくなかった。そこで、登録大学院生は三〇名に増やされた。しかし、それでも、とくに、修士課程の大学院生が自分の研究が多忙になる秋学期の試験期、サポートに入りたくても入れないことが少なくなかった。また、ニーズが三年次の専門科目の場合、それらの科目を教えることができる学生の数は限定されるため、応じることができないこともあった。こうした限界を含みつつも、この制度は、新入生とリスタート学生にとって重要な支援装置となった。

理学部の取り組み 工学部からは遅れて、理学部でも、数学、物理、化学のそれぞれの大学院生TA修学アドバイザーによる勉強法・補習の支援の制度が立ちあげられ、工学部とは異なる展開を遂げていった。筆者ら学生相談所カウンセラーも、カウンセリングを利用する理学部のリスタ

ト学生や発達障害学生の支援にあたって、理学研究科のTAに連携、協働して取り組んだ。TAたちは、発達障害等の適応に苦しむ学生の補習等の支援においても多大の貢献を行った。

大学の居場所化を支援する

〈加工事例二〉カウンセラー（第三層）が教員（第一層）と連携し、ひきこもっていた学生が大学を居場所とすることができた例。

入学後まもなくから、三年間、ひきこもっていた工学部学生の例である。三年目後半、家族に勧められて来談した。この三年間、この学生は、読書にふけり、一人の友人も作らず過ごしたこと、これ以上の休学延長が認められない今の状態に至っては、退学して、何かアルバイトをし、就職口を探すしかないと思っていることを口にした。学生は定期的なカウンセリングを希望した。十か月たった一二月、学生は、いよいよ本気で退学するのか、それとも復学するのか、決意しなければならなくなった。学生は、長く遠ざかった専門の勉強とこれからの対人関係に、きわめて強い不安を抱きながらも、復学にチャレンジすると決心した。

筆者は、学生の同意を得て、学生の分野の教授で、以前

に別の学生のことと一緒に対応したことがある人で、一年数カ月後には退職を控えている先生に、学生のいるそばで電話をした。教授は、学生と面談して知り合いになることを快く引き受けてくれた。翌週、教授と長期にひきこもっていた学生との面談の場が、学生相談所でもたれた。その後、学生は、半年以上にわたって教授の空き時間に研究室を訪れ、個別に専門科目の教えを受けた。その間、四月からは復学し、同じように復学チャレンジしていた二人の理系学生と、同一授業で出会ったのをきっかけに親交を深めていった。学生は、学業を軌道に乗せた。復帰三年目には、後輩学生のために補習サポーター役を買って出てもくれた。四年目の春、就職を決め、翌春、社会人となって巣立っていった。

筆者は、この学生の顔を思い出すと、必ず、この学生に研究室で専門科目を手ほどきし、専門分野のことや、さまざまなことでの対話を楽しまれた教授のことを、なつかしく思い出すのである。